

○7 番 (島崎 敏一) 私は、さきに通告した通告書に基づき、本日は2問の質問をさせていただきます。

まず1問目の「新しい学校づくりプロジェクトについて」です。

1、2月17日のシンポジウムと今後の予定について。

今年度、2年間の議論を経て新しい学校づくりプロジェクトが始まりました。

今年度の集大成として先月——2月17日に新しい学校づくりシンポジウムが実施されました。

シンポジウムの感想を地域の方々に聞いてみました。結果は、よいこと、そうでないこと、様々でした。

非常に興味深い内容で、サテライト会場での聴講も可能など、従来の枠にとらわれない自由な実施形態に対しては高評価の声が多数ありました。

早坂先生のお話は大変興味深く、ステージの上でパネルディスカッションも、歩き始めたばかりの子から中学生、そして民生委員さんまで、幅広く参加し、これからの向けて新しい学校をつくろうという姿勢が感じられたという意見を多く聞きました。

半面、真の意味でのシンポジウム——多様な意見を述べ合う討論会ではなく、先生方の講演会といった名称にしたほうが表現方法としては適していたのではないかという意見もサテライト会場では続出しておりました。

探究的、ごちゃ混ぜを理念に掲げながらもシンポジウムやディスカッションとは名ばかりで対話がほとんどない、子どもも含め地域住民が学校づくりに参加したくなる内容だったのか、既存の枠組みから脱し切れていないのではないか、このままの流れでは建物だけが統合された残念な義務教育学校になってしまうのではないか、そのように思う参加者が多く存在したのもまた事実です。

少々辛辣に聞こえる表現となってしまいました。前のめりに期待している住民からの声だと感じていただければ幸いです。

最初にお伝えした感想の後にお伝えした感想は、意見こそ違うものの、子どもたちの未来のためによい学校をつくりたいという源泉となる思いは同じはずです。

これらの背景を踏まえ質問をします。

シンポジウムを実施して思うこと、考えを聞かせてください。

また、今後の改善点などがあれば聞かせてください。

○教育長 中川村新たな学校づくりプロジェクトのシンポジウムに関わる御質問でございます。

議員から今お伝えいただいたサブ会場におけるシンポジウムへの御意見は、様々な御意見があったということで、今回こういう形でやったことの一つの成果が出ているなというふうに感じさせていただいております。

今の御指摘いただいた御意見ですけれども、内容的にはシンポジウムの手法的な観点での評価だというふうに理解できますが、私どもとしましては、手法的な観点での評価、そういったものをもって建物だけ統合された残念な義務教育学校になってしまうと、そういう評価をされたとすれば、それは非常に残念なことであったというふうに感じております。

新たな学校のコンセプトや講演、何よりも「こんな学校がいい！」をそれぞれの立場から発信していただいたパネリストの皆さんの思いが参加者の皆さんにどう伝わったのか、そのことが心配されるところでございます。

メイン会場とサブ会場の違いということも今回の受け止め方の違いになっているかもしれませんが、そういう御意見をいただいたということで、少しお時間を頂きまして、本年度の取組を振り返りながらシンポジウムについて御質問にお答えをさせていただければというふうに思っております。

議員も御承知と思いますが、教育委員会では、基本方針を定めまして、本年度を村民の皆さんと「こんな学校がいい！」を語り合う一年と、そのように位置づけをしまして取り組んでまいりました。

地区懇談会を10回実施しまして、事務局も含めてでございますが、延べ165人の皆さんに参加をいただいております。

また、語り合いシリーズとしまして、セミナー、2回のワークショップ、それと今御質問のあったシンポジウムと、4回シリーズで取り組んでまいりましたが、延べ25人の皆さんに御参加いただきました。

そのほかにも、本年度は、中学生の皆さん、保護者の皆さん、教職員の皆さん、役員職員の皆さん、また御承知のとおり村議会の皆さんとの学習会に参加させていただきまして語り合いをさせていただくとともに、一般のところではなかがわ夢見る学校プロジェクト実行委員会の皆さんが主催されている座談会にも毎回参加をさせていただきまして語り合いを進めてきたこれまででございます。

それで、教育委員会としては、そうした御意見や語り合いをしてきたことを踏まえて、シンポジウムでお示しをさせていただいたこれからの検討の3つの柱——コンセプト、1つが探究的に学ぶということ、2つ目にごちゃ混ぜに学ぶということ、3つ目に中川村全体を学びの場としてグローバルに学ぶという、この3点をお示したという状況でございます。

今回のシンポジウムにつきましては、これまで以上に多くの皆さんにシンポジウムに参加していただけるようにということで、これまでもずっと関心を持って取り組んでいたなか、なかがわ夢見る学校プロジェクト実行委員会の皆さんとの共催という形を取らせていただいております。

その家庭の中で、やはりいろんな皆さんと知恵を出し合って企画し、デザイナーの方にチラシの依頼をして皆さんで検討するとか、あるいはメイン会場と親子会場——サブ会場の設定をするとか、それで、サブ会場には、御承知のように奏の森、大きな玄関の皆さんにも御協力いただいてサブ会場になっております。

それで、湯茶の準備、これも企画として御意見をいただいた中で、メイン会場で参加した皆さんは本当に休憩中にそこで一服を取って、さらにまた参加していただけたということがありました。

また、今回はユーチューブ配信やCEKの放映、こういったものもやりまして、全部で150の方がシンポジウムに御参加いただけたということでもあります。

また、村外にもアナウンスをさせていただいて、村外からの参加者が多くいらしたという状況でもございました。

パネルディスカッションにおいては中学生にも参加していただいたということで、それぞれの描いている「こんな学校がいい！」をこうした場で発信していただいたこと、こうしたことは非常に価値があったというふうに捉えております。

そうした点から、私どもも既存の枠組みから脱し切れていないとの御指摘がどういふ点を捉えてされたかということとはまたお聞きしてみたいと思いますし、教育行政と一般の皆さんとでこうした企画をしたことが新しいこうした取組を生んでいるという、このこと自体がこれからの私どもの取組の一つの方向性かなというふうに理解をしております。そういう点では、一定の成果は上げられたのではないかなということをおもっております。

多くの皆さんにということでございますと、最後に申し上げたいのが、過日、公民館講座の福寿学級の修了式で御挨拶をさせていただきましたが、受講されている皆さんは分かっていたかと思っております、「令和12年」というパネルを持ち出して、皆さんこれが分かりますかと言いましたら、あちこちで新しい学校ができるんだよねというつぶやきが多くありました。村民の皆さんにも今取り組んでいることが広がりを見せているなという点では非常に手応えを感じた時間でもございました。

以上でございます。

それと、改善点ということですが、御質問の趣旨からしますと、一番は村民の皆さんの参画、あるいは対話や議論を大事にしてほしいと、そういう趣旨の御質問だと理解をしておりますので、これからの取組と改善点ということではありませんけれども、これから教育委員会としましてもこうしたことを大事に取り組んでいきたいというふうに考えているところでございます。

○7 番 （島崎 敏一） 考えなどをお伺いしました。

私が先ほど読み上げたいろいろな御意見も、私自身も含めてですが、子どもたちの未来のためによい学校をつくりたい、その上で、より住民参画を促したりするのですとか、まだ声なき声といいますか、うまく自分の気持ちに整理がついていないような住民の方々、意見を発していない方々の声も柔軟に聞く姿勢が求められるかなと思えます。

そんな思いと期待を込めて2つ目の質問に行きます。

今後の予定。地域と行政がタイヤの両輪となるために。

来年度は基本計画の策定が始まります。

私の思いは1年前のこの場での一般質問の「スクールデザインプロジェクト(仮称)について」から変わりません。それは、子どもを含めた多様な住民の声を育み、学校づくりに反映させていくことが重要だということです。

そのときの教育長の答弁は「広く村民の皆さんや保護者の皆さんの御意見を伺ったりして参画していただくようなやり方を想定しまして、」でした。

ですが、あれから1年たっても以前と同じ課題があるように感じます。これは、す

みません、繰り返し申し上げますけれども、住民参画がまだまだ限定的ではないかと思っているからです。

シンポジウムで話題に上がった探究的、ごちゃ混ぜ、グローバル、地域と学校の連携、協働、これらを真の意味で実現させるためには地域総がかりでの活動が必須であり、先日の早坂先生の話にあったように大人が本気で社会を変えていくという姿を見せていくべきです。以上のことを前提に下記の質問をします。

来年度の具体的な計画を聞かせてください。

基本計画の委員はどのような仕組みになりますか。

来年度の基本計画についても、引き続き住民の当事者意識を高めて住民参画の機運を高める必要があると考えます。今年度は複数回の懇談会やワークショップを実施しましたが、参画の範囲はまだまだ限定的でした。同じことをやっても同じ結果しか得ることができないと考えます。具体的な対策を聞かせてください。

○教育長 現在は、シンポジウムも終えまして、来年度はどのように詳細検討を進めていくか、まさに現状を捉えながら検討を進めている最中でございます。

議員からは1年たっても村民の皆さんの参画については課題が改善されていないとの評価をいただきましたが、声なき声という言われ方をしましたけれども、思いがありながらまだそれを表明できていないという方々も確かにいらっしゃるということは承知をしております。

ただ、それではこうした取組が1年たてば一気に御評価いただけるような動きになっていくかといえば、そうではないだろうというふうに捉えております。

例えばそういったところに参加していただくということになると、ある種のノルマを設けて、もうとにかく来てもらうとか、いろんなやり方もあるとは思いますが、大体そうしたトップダウン的な動きっていうのは長続きしていかないだろうということをおもっております。

ですから、今年一年も取り組んでまいりましたけれども、でき得る様々なやり方を進めながら、じっくりとそうした裾野を広げていながら御意見をいただく、そのことが真に皆さんの要望にお応えしていくような学校につながっていくのではないかと、いうふうに思っております。

また、シンポジウムもそうでしたけれども、現在高い関心を持っていただけている方はさらにこれからそれぞれの場所での核になっていただける方だと思っておりますので、そういう方々を通じてまた広がりを見せていくと、そうしたこれからの効果もあるのではないかと、思っております。

来年度は詳細検討を進め、基本計画の策定に取り組みますけれども、仕組みとしましては、まだ仮称ではありますが新たな学校づくり委員会というものを設置しまして策定を進める予定でございます。

その上で、テーマに関わること、例えばカリキュラムのこととか、校舎のことであるとか、地域連携のことであるとか、そういう核テーマに関わるようなことについては、部会を組織しまして集中的に、また広く御意見をお伺いしながら検討を進めてい



くと、そんな形を今は検討中でございます。

また、部会が部会の考え方で、例えばワークショップをしてみるとか、アンケートを取ってみるとか、ヒアリングをしてみるとか、そんなことがあってもまたいいのかなというふうに想定はしております。

いずれにしても、来年度はさらに基本計画というところへ踏み込んでまいりますので、できるだけお答えしたような状況に進められるように努めてまいりたいというふうには思っております。

○7 番 (島崎 敏一) 今のお答えの中で1点、ちょっと確認したいんですけども、引き続き部会をつくるというふうにさっきはおっしゃっていましたが、部会の中でいろいろな検討を進める中で、一般住民の方の意見が反映されるような場というか、グループワークといいますか、そういったようなものがあってほしいなと思うのですが、いかがですか。

○教育長 先ほどお答えさせていただきましたように、そうしたことも想定して現在検討中でございます。

また、委員とか部会の構成メンバーみたいなどころには、また一般の皆さんも参加していただけるようなことを今は想定しておりますので、そういったところも併せて検討を進めたいというふうに思っております。

○7 番 (島崎 敏一) もう一つ、最初の答弁の中で、声なき声を集めるためには、やはりトップダウンでは駄目ということで、じっくりと聞く場というふうに答弁があったんですけども——私自身、長野県内のそういった対話の勉強会というか、ファシリテーションの勉強会に参加しているんです。

県内の行政職員さんですとか市民団体ですとか、そういった方々と、社会課題とか環境問題とか、どうすれば多くの関心を持ってもらえるかなというときに、いろいろ検討——検討というか、皆で事例を出し合って検討したんですけども、無関心な人はいないであろうという結論がその仲間では出ました。

やはり、なかなか自分がどう考えているのかを言葉にした経験を持つ人が少ない中で、話したことがなければ自分の中にある漠然とした関心とか、そういったことを整理することもできないし、何かそういったことをざっくばらんに話す場は必要なのかなと思います。

そのときに出たキーワードにとっても言い得て妙だなと思うものがありまして、飲み会では皆さんすごく饒舌にお話しされるじゃないですか。方や、ワークショップのような堅苦しい場だとなかなか発言が出なかったりして、飲み会以上、ワークショップ未満というような対話の場のデザインがあれば、皆意見を、言葉にならない思いを整理して出せるのかなと、そんな話もしました。

次の質問に行きます。

現在の教育委員会の人員配置は足りていますでしょうか。不足しているとしたら働き方改革をどう進めるとよいと考えますか。

外部人材登用（地域プロジェクトマネジャーや教育魅力化コーディネーターなど）

の検討の可能性はありますか。

考えを聞かせてください。

○教育長 人員のついての御質問でございます。

教育委員会の職員につきましては、新たな学校の建設に向けた準備も踏まえまして、来年度増員される見込みでございます。

御提案いただいた外部人材の登用については、当然、事務局の中だけでは成り立たない部分もございますので、来年度は業務支援を委託する、そういう方向性で予算計上をさせていただいておりますので、それぞれの専門分野で取組についての支援をいただく予定でございます。

また、シンポジウムで御講演いただいた研究者の早坂先生につきましても専門的な立場から引き続きプロジェクトに関わっていただけることになっておりますので、来年度は、そういった点では様々な立場の皆様に関わっていただいて御支援をいただける予定でございます。

また、そういう状況を私どももまた期待して取り組みたいと思っております。

また、議員から御提案いただきました地域プロジェクトマネジャー、あるいは教育魅力化コーディネーターなどにつきましては、改めて調べてみますと特色ある活用をしている市町村もあるようであります。

これからプロジェクトを進めていく上でそうした立場の方々の必要性や有効性がさらに高まってくれば、活用については十分検討し得るかなということをおもっておりますので、今後の取組の中でまた検討してまいりたいというふうに思っております。

○7 番 (島崎 敏一) 人員が増えるということをお聞きしました。

それと、あとは地域プロジェクトマネジャー、教育魅力化コーディネーターなどは前向きに検討していただきたいと思っております。

次の質問です。

来年度、こども家庭センターが開設され、教育委員会と保健福祉課は、より親密な連携を取るべき状況となります。子どもの健全な発育という観点で学校づくりプロジェクトを捉え、統合的に連携を図っていくべきと考えます。

また、みなかた、片桐、両保育園は県の自然保育認定園となり、また野外保育もりっも精力的に活動しています。

保育内容も保育士さんの意識も保護者の意識も徐々に高まりつつあり、今後はプロジェクトとの連携が必要だという声を多く聞きますが、来年度の基本計画策定についての考えを聞かせてください。

○教育長 それでは教育委員会のほうからお答えをさせていただきますが、保育園から小学校へのつながりについてということでございますが、現在、情報共有のような点でありますとか連絡を取り合ったりするなど、いわゆる連携という観点では、小中と保育園は取り組んでいるかなというふうに思っておりますけれども、これはさきの在り方検討のところでも少し課題になったんですが、保育園から教育への接続という点、そういう点で課題があるかなというふうには捉えております。

今両園で取り組んでいる「やまほいく」ですけれども、子どもたちが野外においての遊びを中心に目的的な活動を展開するという点で、主体性や昨今言われている非認知能力が培われるよい活動だというふうに私も理解をしております。

そうした活動のよさでありますので、当然、それを小学校へどう引き継ぐかと、つまり接続という点はやはり大事に考えていかなければいけないなということを思っております。プロジェクトでは、そうした接続という観点を意識した保育園から小中学校への一貫したカリキュラム検討、そういうことが必要ではないかと思っておりますので、詳細検討の中ではカリキュラムに関わる検討もする予定でおりますので、そういう中では、特にそうした接続という点は大事に考えていきたいというふうに思っているところでございます。

○村 長 幼児期の教育については、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要な時期というふうに言われておるところであります。

行政としましては、全ての子どもにひとしく機会を与えて育成していく、こういうことが求められております。

幼児期は遊びを通して小学校以降の学習の基礎となる芽生えを培う時期でもあり、小学校においてはその芽生えをさらに伸ばしていく、こういうことが求められるということでもあります。

しかしながら、幼児教育と小学校教育の円滑な接続を図っていく、こういうことは非常に難しいことだというふうに思っております。5歳児～小学校1年生の2年間、これをかけ橋期というふうに呼ぶ言い方もあるようでありまして、この2年間の教育の充実を図り、生涯にわたる学びや生活の基礎をつくることに幼児教育では重きが置かれているということでございます。

したがいまして、今、教育長からも答弁がありましたとおり、この考え方の下に新しい学校の基本計画の策定を進める中で幼児教育と学校教育との接続について考えていくということでございますので、一緒に検討をしてまいりたいというふうに考えております。

また、関連する事項でございますが、児童クラブについてもどうあるべきかということがずっと議論されておりますので、これについても基本計画の中で検討していく必要があるのではないかというふうに、こちらのほうとしては——こちらという言い方はありませんが、考えておるところでございます。

○7 番 (島崎 敏一) 保育園から小学校については接続という観点で一緒に検討していくという答弁で、さらに村長からは児童クラブも一緒に考えていくとおっしゃいましたが、放課後子ども教室についてはどんなお考えでしょうか。

○教育長 放課後子ども教室については、今まさにこれからどうするかということを検討しておりますので、学校そのものの検討の直接的なものではありませんけれども、今、村長からのお話がありましたように、児童クラブでありますとか放課後子ども教室という学校以外の活動については、特に環境面、子どもたちの学びや生活の環境面で関わってくるところが出てくると思っておりますので、放課後子ども教室につきまして

も検討は進めてまいります。

○7 番 (島崎 敏一) そういった児童クラブ、放課後子ども教室、保育園も含め、ぜひ地域総がかりでの検討を地域住民の皆さんも交えてやっていけたらと思いますので、よろしく願いいたします。

次の質問に行きます。

「人口減少について」

若手女性から選ばれていない事実を受け入れて事実を把握するべき。

上伊那広域連合は昨年12月12日に「女性から選ばれる上伊那になるために」をテーマにした講演会を開きました。企業や行政関係者ら約180人が聴講し、上伊那地域の人口データを基にした人口減少の実態、今後の取組についてなどについての講演とシンポジウムを通して上伊那地域のこれからのことについて考えたそうです。

ニッセイ基礎研究所生活研究部人口動態シニアリサーチャーの天野馨南子氏が上伊那の人口データを基に分析して講演しました。

上伊那8市町村では、2014年～2022年の9年間で1,689人が転居により純減したと示し——これは資料2のほうにグラフがありますので御覧ください。上伊那の人口減少の最大要因は就活による20代前半女性の転出超過と指摘しました。

さらに、出産は女性が担うため、自然減（出生減）にも影響があり、20代前半女性の就職期の転出超過に歯止めをかけなければ上伊那の人口増加、減少抑制は困難と強調、今の高校生や大学生は25歳30歳時点で仕事の比重を最も高くライフデザインしているとし、20代独身女性に響くUIターン施策が最優先と指摘しました。

天野氏の語る事実を抜きに人口減少対策、移住・定住対策をしてきたことは、水をためるバケツに穴が空いているようなものだと考えます。事実を正しく知り、行動を起こすことが大切と考えます。

この間の金曜日の一般質問で2番議員も人口減少対策について質問しておりましたが、これらの事実について関連課の考えを聞かせてください。

○地域政策課長 それでは、ただいまの御質問にお答えをさせていただきます。

12月に開催された上伊那広域連合主催の講演会を聴講しまして、議員の説明のとおり、上伊那8市町村での2014年からの9年間での転居による社会減が1,689人ということでありまして、うち20代前半女性の純減が減少寄与率97%で、圧倒的な要因であると伺っております。

年齢階層別の減少人口状況を見ても男女を含めて就職期の10代後半～20代前半の影響が大きく、この年代の人口定着を見込まなければ人口維持、出生率の増加は見込めず、将来的に人口減少の歯止めがかからないと危惧していると、また出生率が1.5人を下回ると人口回復は難しいとも天野先生のほうではおっしゃっておりました。

それで、特に若い女性の人口流出問題については去る3月1日の信濃毎日新聞の記事でも大きく取り上げられており、県としても課題になっているということでもあります。

議員がおっしゃる若手女性から選ばれていないことについては精査が必要と考えま



すが、天野先生が指摘するとおり、就職期の10代後半～20代前半の女性の皆さんは結婚後の仕事を最重視する傾向が大きいことが報告されておりまして、20代女性に響くUターン施策が最優先であり、20代女性のライフデザインの最優先項目はキャリア形成とのことであります。

また、信濃毎日新聞の記事には、長野県が男性に比べて女性に選ばれにくい理由として、若い人が希望する職場が少ない、また女性が活躍しにくい社会の背景には昔ながらの性別役割分業意識が根強いこともあるのではとも書かれておりまして、こういった社会環境そのものを変えていくのは、小さな自治体単独での対応には限界がございます。広域連合、さらには県全体での取組が必要と感じております。

上伊那広域連合では、近年、郷土愛プロジェクトを中心としました小中校の早期からのキャリア支援及び郷土愛の醸成、若者人材確保実行委員会を中心とした学生向け就職支援、若者向け交流会やアンケート調査を実施しております。上伊那で働く若手社員と学生が本音で語り合う企画も実施しまして、若者の上伊那での定着推進を図っております。

殊に女性に限定した取組ではありませんが、若者の上伊那への定着に向けて様々な取組を進めております。引き続き広域での連携に努めながら、上伊那全体として若者の定着について検討していきたいと考えております。

また、村でも中学校でのキャリア教育の推進を行っておりまして、多くの職種での体験も要望されております。引き続き充実を図っていくよう、教育委員会とも連携をしていきたいと考えております。

○7 番 （島崎 敏一） 今、恐らく2番のほうまで一緒に課長のほうでお答えいただいたものだと思います。

私自身の感想としては、天野さんの講演は聞けなかったんですけども、資料を頂いて本当に衝撃を受けまして、移住者を増やせば人口減が緩和できると思いきや、そこで生まれ育った女性が出ていってしまったのでは本当に人口減はなかなか緩和できないのだなというのを改めて知って、この事実を知らない住民の方はまだまだ多くいらっしゃると思うんですね。

そこで、村の中でできることがあるとすれば、まずは事実を知るべきではないかなと考えます。上伊那全体で考えることも大事ですが、村の中で講演会や学習会などを開催し、村の幅広い方々、オール中川で考える機会をつくるべきと考えますが、考えを聞かせてください。

○地域政策課長 それぞれの自治体、村という単位での講演会や、そういった学習会というようなお話であります。

先ほども述べさせていただいたとおり、やはり小さな自治体だけでは限界があると考えます。

その中で、村でもいろんなメンバー、いろんな方々からの御意見等もいただく機会は必要と考えておりますが、戻ってきてキャリア形成ができるような選択をするのは、やはり上伊那全体で取り組むべき課題でありまして、基盤のある郷土愛プロジェクト

や若者人材確保実行委員会での施策推進が現実的ではないかと考えております。

今後はその情報の提供をしっかりと行っていきたいということと、若年層——中学生、高校生の年代からの上伊那の就職場所についての情報提供、またそこで働く若手の生の声を聞いてもらうなど、まだまだブラッシュアップできるところもあるように感じておりますので、若者人材確保実行委員として村からも参画しておりますので、その辺は担当部署とも共有して検討していきたいと考えております。

○7 番 （島崎 敏一） 積極的な活動のほうをよろしく願いいたします。

次の質問に行きます。

人口減少対策の場には若手当事者の委員登用をするべき。

日本経済新聞の地図で見る管理職の女性割合の調査によると、管理職に占める女性の比率を都道府県別に見ると最下位は長野県で13.5%——これは去年の数字だったんですけど、最近は少し改善されたそうです、44位ぐらい。

また、職場以外でもジェンダーギャップや狭い地域社会に窮屈さを感じる若者は少なくないと聞きます。

その半面で、都会から戻ってきた20代が存在するのも事実です。身の回りの20代やUターンしてきた女性に聞き取りをすると、幼少期から10代間の地域の方との交流が思い出に残っていた、地域に恩返しをしたいという声が上がりました。これは、単に人口動態を追うだけでは得られない、何らかの希望を感じさせる事実です。

そこで質問なんですけど、人口減少対策の場（後期計画や後期戦略）の検討の場などで若手——10代～20代前半の当事者の委員を登用して実態把握の精度を上げるべきと考えます。アンケートだけでは断片的な情報しか得ることができないので不十分だと考えます。

担当課の考えを聞かせてください。

○地域政策課長 少子化、人口減少への対策は喫緊の課題と認識しております。

長野県でも少子化・人口減少対策戦略方針案が決定されまして、人口減少のスピードの緩和と人口減少社会への適応を基本目標に掲げ、秋頃をめどにまとめられる予定と聞いております。

村でも人口の急激な減少を抑制するために第2期総合戦略を策定し、切れ目のない取組を進めてきております。

今回の総合計画後期基本計画策定に当たっては、総合戦略と一体的な策定を行い、整合性の取れた計画策定を目指しております。今回は基本構想など大きな部分の見直しはなく、基本計画の5か年計画の策定になることは御承知おきいただきたいと思っております。

また、若手当事者の委員登用につきましては、8月頃をめどに総合計画審議会の委員について公募を行う予定でありまして、組織については村の各委員会等の委員及び団体の役職の方、職員等や学識経験者となっているため、こちらから若者を登用するというのはちょっと難しいかと思っておりますけれども、進めてまいりたいと思っております。

中川村議会 令和6年3月定例会一般質問（3／11）島崎敏一

それで、総合計画の審議会は素案について議論をいただく場となりますので、それ以前のこれから春先に行うアンケート調査や、またワークショップでの意見聴取が重要と考えております。そういった場に出やすい環境づくりについては検討を進めていきたいと考えております。

○7 番 （島崎 敏一） 今、課長の答弁の中で前期の計画のときに做って大きな見直しはしないとありましたが、これだけ社会の情勢が変わって、このまま行ったら次の5年はすごく時代の分かれ道になるんじゃないのかというようなすごく危機的な状況を鑑みる中で、今できるベストをやるべきだと思います。

素案づくりの中でアンケートやワークショップをやるとおっしゃいましたが、1個目の質問のときにも私は発言したんですけども、若い人たちはなかなか自分の地域に対する思いを言う機会がないので、そういった声なき声を丁寧に集めるのが大事だと思います。

先ほど私の話に出しましたが、ワークショップではとても堅い会になってしまうので、飲み会以上、ワークショップ未満のようなざくばらんに意見を言い合える場が必要かなと思いますが、何かお考えはありますか。

○地域政策課長 細かな具体案というのは今のところちょっとまだ持ち合わせてはおりませんけれども、今後、これから動いていく事案でございますので、若い皆さんのそれぞれの声が届くような、そういった場がつかれるか、もしくはどういった意見聴取ができるかということについては検討を進めてまいりたいと思っております。

○7 番 （島崎 敏一） ぜひ検討のほうをよろしく願いいたします。

次の質問です。

今の私の質問と重複する部分ではあるんですが、従来型の会議体では多様な意見が出にくいと考えます。会議の参加者が対話できる場のデザインを再検討するべきと考えます。

ファシリテーションを軸とした合意形成が肝腎と考えますが、担当課の考えを聞かせてください。

○地域政策課長 先ほども申し上げましたが、まずはアンケート調査や前期基本計画の事後評価を行いながらワークショップのテーマについて検討をしていきたいということでもあります。

人口減少対策につきましても重要事項と考えられますので、テーマとして必要かを十分に検討していきたいということでもあります。

今回の後期基本計画であります、策定された基本構想に沿いながらの基本計画策定となるため、位置からつくり上げていくというものではございませんので、第6次総合計画後期基本計画は前期基本計画の実績と課題を踏まえて今後5年間の各種施策の基本的な方針と目標を定めるというものであります。基本的には第6次総合計画の基本構想に沿って策定ということで、先ほど申し上げましたが、一から見直すものではないということは御理解をいただきたいと思っております。

また、参加者が参加しやすい環境づくりは重要と当然考えておりますので、どのような形で開催するのがよいかは、後期基本計画策定支援業務を担う業者が決定しまし

中川村議会 令和6年3月定例会一般質問（3／11）島崎敏一

たら専門的知見をいただきながら検討したいと考えております。

○7 番 （島崎 敏一） ぜひ村民の方が自分事として捉えられるような会になることを望みます。

そして、若手の10代～20代の方の意見を聞くところでは子どもに関わる部分でもあります。子どもの福祉と、あとは教育に関わる観点から保健福祉課長と教育長の考えを聞かせてください。

○保健福祉課長 それでは保健福祉課からお答えをさせていただきます。

保健福祉課からは、議員の2番目の質問でありました、従来の会議体では多様な意見が出にくい、会議の参加者が対話できる場のデザインを再検討するべき、ファシリテーションを軸としての合意形成が肝腎というようなところでちょっと回答をさせていただきたいと思っております。

保健福祉課では、令和6年度にこども家庭センターを設置することから、センターで何をするか、何から始めたらいいか、子育て施策、センターの方向性について職員的意思を統一する必要があることから、ファシリテーション形式で実は課内会議を実施した経過があります。参加した職員は子育て支援に関わる専門職、事務員10人です。

まず子どもに関する課題を出し、課題の整理、解決策までまとめました。その内容を令和6年度の子どもに関する予算にも反映させてあります。

参加した職員からは、子どもに関する課題の整理ができてよかった、何が一番の問題なのかも分かった、こういう会議は大事だと思ったなどの感想がありました。

また、今の自分の仕事を見詰め直すこともできたようでした。このことから、課内の合意形成ができたと思っております。

新しい施策を進めるときに、そこに携わる人たちに課題の共有を行い、向かう方向を同じにするためには、ファシリテーション形式での会議は有意義なものだと感じております。

また、住民の皆さんに、村の課題、例えば人口減少問題などを人ごとではなく自分事として考えてもらうためには、ファシリテーション形式で会議を開催して見てもいいかもしれないと思われました。

来年度、保健福祉課ではこども計画を策定していきます。その中で子どもの意見を聞く観点から子どもたちの参加を募ってファシリテーション形式で意見を聞く会を開催してみてもいいかと考えております。

○教育長 最初に、ファシリテーションを軸とした合意形成っていうようなお話があって、いろんな方に興味を持っていただいて参画をとということがありますが、ファシリテーションっていう形自体が人々の関心を向けてもらう大きな唯一の仕掛けでは当然ないということを私は思っております。

教育委員会が取り組んだ一つとすれば、先ほどいろんな御意見をいただいたシンポジウムですけども、例えばメイン会場にアクセスできる方もいれば、サブ会場であればアクセスできる方がいれば、ユーチューブ配信であれば個人でそれを見るところからアクセスできる方がいるっていう、それぞれのいろんな在り方でアクセスしてい

中川村議会 令和6年3月定例会一般質問（3／11）島崎敏一

ただくってという形を今回は取ったってということが一つのやり方であるというふうに御承知いただければと思います。

それと、若者の村への関心っていうようなことで少しお話をさせていただきたいと思いますが、議員のほうからお話のあった聞き取りでは、地域の方との交流が思い出に残っていると、あるいは地域に恩返ししたいという思いが若者から聞かれたということで、これは私自身も非常に重なる思いがあります。

それで、例えば成人式の1分間スピーチでも、行く行くは村へ、あるいは地域へ帰ってきたいという発言も聞かれました。

また、新たな学校づくりプロジェクトの語り合いの中では、子ども時代に地域の方から学んだことが中川村での今の生活につながっていると、そういう発言も現にございました。これは非常に印象に残っております。

また、やっぱりふるさとってというのは、人こそふるさとではないかと、当然、地域の自然とか、そういうものもあるんですが、私も久々に中川村で仕事をさせていただいて皆さんと出会ったときに、やっぱり人こそふるさとだなということを感じさせていただきました。

というのは、やはり子ども時代に経験する地域の皆さんとの交流、これが子どもたちの成長に大きな影響を与えているんだということが議員の聞き取っていただいた若者の言葉にも出ているのではないかということをおもっております。

村に帰ってくるも、あるいは村以外で活躍していただく方もいると思うんですけども、いずれにしても子どもたちのよき未来につながる、そうした経験を積んでもらうということは大事だと思っておりますので、これまで教育委員会はふるさと学習にも取り組んでまいりましたが、新たな学校においてはさらに、また学校教育だけではなく、社会教育においてもそんな機会を大事にできるように、また取り組めたらいいなというふうに思っております。

○7 番 （島崎 敏一） ファシリテーションの件と、あとはシンポジウムの事例の件と、あとは人こそふるさとという話、ありがとうございました。

いろいろな手法とかアイデアを使って、本当に村総がかりでこれらの問題を緩和といたしますか、対策を取っていく必要があると感じています。

そこで、村の代表である村長の考えを最後に一言聞かせてください。

○村 長 計画の中に、例えば若い人は何を考えているのか、将来、どういうふうに村に戻ってくるのか、また戻りたいと思うのか、こういったところについてはいろいろ思うところがありますけれども、トータルで申し上げて、やはり村だけではこのことはなかなか進めないだろうなと思っております。それで、それが広域連合で進めていくよきでもあろうかと思っております。

ただし、そのことを全く無視するということではなくて、いろんな計画をつくるときにできるだけ若い人の意見も上げていけるような場、これはやはり常に考えていかなければいけないんじゃないかなっていうことは、ずっと議論を聞きながらそう思ったところでもあります。

中川村議会 令和6年3月定例会一般質問（3／11）島崎敏一

ただ、心配なのは、こういう決めつけ方はいけないんですけど、例えば、今は若い人の投票率が非常に下がっているんですね。それで、これは政治だけに対してそういうふうに思っているのか、だとすれば、政治の在り方、信頼を損ねたのを直せばいいんだけど、もしかしたら全体にそんな思いがあるのかもしれないなと思います。

つまり、村の将来についてどういうふうに考えているのか、それはきっと思いもあるんでしょうけれども、できるだけ戻ってこられる、こういうふうな村になればいいということも若い人の意見を聞いて——方法はいろいろあろうかと思いますが——考えていくべきことかというふうに、議論を聞きながらつつい考えております。

○議 長 終わりです。

○7 番 （島崎 敏一） ありがとうございます。

これで質問を終わります。